

## 「インドネシア農村調査から経済史研究へ 40 年間の蛇行」

### 1. 駆け出しのころ

私は 1970 年に東京大学経済学部を卒業しました。今私は国分寺市に住んでおりますが、近くに東芝の府中工場があり、その前を道路が通っています。そこで、1968 年に 3 億円事件がありました。初めから脱線しますが、当時私の住んでいたところも同じ多摩地区でして、とにかく、車の運転免許とアマチュア無線の免許を両方持っている多摩地区の若者のなかに犯人がいる可能性があるので、該当者はしらみつぶしに調べるというローラー作戦を地元の警察が始めたときに、私もリストアップされてしまいました。刑事さんがお二人自宅へお見えになり玄関に座り込んで、1 時間ぐらい根掘り葉掘り聞かれました。そのころはまだ学生でしたが、具合の悪いことに事件当日は大学に泊まり込んでいてアリバイがない。やばいなと思っていたところ、話の最後に刑事さんが立ち上がりざま「あなたが犯人ではないことはよく分かった」と告げました。なぜかという「犯人はあなたよりもっと背が高く色が白い」とのこと（笑）。そういう時代に大学を卒業して、経済的な事情もあったものですから、大学院へは進学せず、いったんは普通の会社に就職しました。その後アジ研の試験を受け、1 年後の 1971 年から勤めさせていただきました。

学生のころは騒然たる時期でしたので勉強していませんが、一応経済学部の西洋経済史のゼミに所属していました。ですから、経済史への関心がどうしても私の頭の中から離れないのは、まだ「門前の小僧習わぬ経を読み」の時代に頭の中に染みついたことが今でも尾を引いているということだと思います。

アジ研に入ると調査研究部へ配属になりました。東南アジア、特にインドネシアの農村事情を調べる人間がいないので、それをやってくれないかと言われまして、もともとそういうテーマに私自身関心がありましたので、それではやりましょうとインドネシアのことをやることになった。それがなれそめです。ところが、最初の 5 年間は海外出張の機会に全く恵まれませんでした。74 年ぐらいにもう海外派遣へ出ることが決まっていたのですが、その当時インドネシアから調査許可を取るのが大変難しく、ビザが出るまで 2 年もかかりました。ですから、最初の 5 年間はいろいろな準備の勉強をしていた時期です。

そのころやっていたことは三つあります。一つは、滝川勉さんが当時農業総合研究所にいらした斎藤仁先生と語らって組織された研究グループに入れていただき、インドネシアの協同組合運動の歴史をまとめる仕事をしました。二つめは、私の経済学部時代の恩師のまた恩師である大塚久雄先生を主査として組織された研究会に参加しました。そこではインドネシアの経済史に関して、戦前のオランダの学者が行った論争、二重経済論で有名なブーケとその門弟でブルヘルという人がおりますが、その二人が 1950 年代に行った論争を取り上げて紹介することをしました。それからもう一つ、当時はインドネシアの農村に関する統計や情報がほとんどなかったため、オランダ時代のジャワ農村事情や土地制度を調査した報告書をできるだけ見たいとおもうと思い、オランダ語の勉強をしていました。一橋大学の図書館で 1870 年代にオランダ政府が行った調査の報告書が残っていたのを見つけてきて、そのコピーを全部読んでまとめる

作業をしました。

その成果の一つである「19 世紀ジャワの土地制度と村落（デサ）共同体」<sup>i</sup>を、英語に直して 1977 年に出しましたが、これはあとで非常に有益でした。当時こんな古いものまできちんと勉強した人間は本家のオランダにもいなかったようで、これを読めば概略がつかめるということで、オランダの研究者たちが重宝がるというちょっと奇妙な経験をすることになりました。それが縁でオランダの研究者とも仲良しになれたのは後々大きな収穫でした。

## 2. 海外派遣とジャワ農村調査

その後、ようやく 1976～78 年に 2 年間インドネシアに行きましたが、ジャワの農村事情はジャカルタにいたのでは分からないだろうということで、もっと奥の方へ入ろうと考えました。ご承知のように、ジャワは種族別のグループでいうとジャワ族が一番多くて、その次が西ジャワのスダ族、それから東部ジャワのマドゥラ族等々という種族構成になっています。ジャワ族は中・東部ジャワが本拠地ですので、中部ジャワのジョグジャカルタにありますガジャ・マダ大学の経済学部で居候させてもらうことになりました。その中でも中部ジャワと東部ジャワはかなり違うということで、当時いろいろな統計的指標は全然ないのですが、いろいろ下見をしたり知人の話を聞いたりして、中部ジャワからジョグジャカルタ近郊の村を一つ、それから東部ジャワのマラン県の高原盆地にある村を一つ、計 2 つの村を 2 年間の海外派遣中に調査することにしました。

それをモノグラフにしたのが、一つは『パグララン』<sup>ii</sup>、これは東部ジャワの方です。もう一つは『サワハン』<sup>iii</sup>、これは中部ジャワの方です。両方ともいまだたら英語に直すことを考えるのですが、若いころは英語ではなくインドネシア語に翻訳してやろうという妙なことを考えまして、『パグララン』の方は自分でインドネシア語に翻訳しました。これは実際にやってみるととても手間がかかる作業で、たとえ自分の書いたものでも翻訳とはこんなに難しいものかと痛感させられました。『サワハン』の方もやりたかったのですが力尽きてしまい、手つかずのままという状態です。

そういうモノグラフを基に、当時ジャワ農村についての仕事として一世を風靡していた有名な文化人類学者のクリフォード・ギアツの *Agricultural Involution*<sup>iv</sup> という本がありますが、それに少し批判をしてみようということで書いたのが「ジャワ農村経済史研究の視座転換『インボリューション』テーゼの批判的検討」<sup>v</sup>です。これは、今の東南アジア学会の前身である東南アジア史学会の大会で海外調査の成果について話すよう求められ口頭報告をしたら、それにもう少し手を入れて論文にまとめるべきだとアドバイスしてくれた方がいて『アジア経済』に載せたものです。本人は軽い気持ちで書いたのですが、それが思いがけなくも評価をいただいて、発展途上国研究奨励賞を受賞することになったのです。

## 3. 農村調査の拡大と顛末

1980 年に東京大学東洋文化研究所に移ってからもしばらく余勢が続きまして、農村調査を拡大しほかの地方でもやるということが 1990 年代ぐらまで続きました。そのころの仕事を抜き出してみますと、「ダゲン イスラーム・カルヤワンの村の社会経済構造」<sup>vi</sup>があります。ダゲ

ンというのもジョグジャカルタ近郊の村の名前です。サワハンがジョグジャカルタ市の南方に位置するのに対して、この村は西方にあります。そこで調査をしました。これは、フィリピンの中部ルソンとインドネシアの中部ジャワの農村の社会経済構造について異文化間の比較を行うことを目的とした科研費調査の一環で、このときの研究代表者は、東京大学経済学部の教授でアジ研の OB でもあり、後に理事さんになられた高橋彰先生でした。またそのときの団員は、私やいまアジ研の所長になっておられる白石隆さんなどでした。中部ルソンではブラカンとヌエバエシハの 2 つの州の村を一つずつ調べたのに対して、中部ジャワではジョグジャカルタの村を私が、隣のスラカルタ地方クラテン県にある村を白石さんが張り付いて調査しました。以上 4 カ村の調査報告をまとめた報告書のなかの一章ということになります。

それから、中部タイの稲作農村経済調査に動員されたこともありました。そのころ東文研にいらっしゃった山田三郎先生（現名誉教授）を団長として、実際のオーガナイズはやはりいま名誉教授になっている原洋之介さんが担当されて、中部タイのスパンブリ県という所で調査をしました。このときは東京大学農学部にいらっしゃった田中学先生（やはり現名誉教授）それから当時東文研助手でいま京都大学教授になっておられる福井清一さんといった顔ぶれでやりました。実際に農村に張り付いて調査をしたのは私と田中先生、福井さんの 3 人でしたが、実は 3 人ともタイ語がほとんどできないのです。チュラロンコン大学の学生たちに通訳をしてもらいさんざん苦労して調査をしました。

その後 1986～1987 年にオランダの国際文化会館のフェローで 2 年間海外へ行かせていただくことになって、最初の 1 年間はオランダに行きました。オランダのアムステルダムにいて資料調査をするころから、だんだん歴史の方に重点が移ってきました。

オランダにいたときに、20 世紀の初めの中部ジャワの北海岸のチョマル郡という地方について、大変詳しい農家の世帯レベルにまで下りたデータを収録した、当時の調査報告書を見つけて、そこが今どうなっているか、比較調査しようというプロジェクトを企画しました。日本側から、私と当時まだアジ研にいた水野廣祐さん（現京都大学教授）、田中学先生、それからオランダのアムステルダムを中心とする研究グループ、文化人類学者のフランス・ヒュスケン、経済史家のペーター・ボームハールドといった人たち、さらにはインドネシアのガジャ・マダ大学の歴史や農業経済の人たちと三国共同のチームを作って、3 年間ほど調査をしました。そのうちのわれわれが担当した部分だけを取りあえず日本語でまとめたのが『中部ジャワ農村の経済変容 チョマル郡の 85 年』<sup>vii</sup>です。

1990 年代の初めにやったこの調査以後は、あまり農村に張り付いた調査はしておりません。それ以降、研究テーマが他の分野にシフトしたり、諸般の事情から農村に密着した調査ができない環境になってしまったためでした。

#### 4. インドネシア農村経済論

ケーススタディとしての農村のモノグラフではなく、ジャワの農村・農業の全体像がどうなっているのか、農業以外の就業や所得にまで目配りした農村経済論を提示したいと思うようになり、いろいろ書いたものをまとめたのが、『インドネシア農村経済論』<sup>viii</sup>という本です。これも幸い評価をされ、毎日新聞社のアジア調査会から賞を頂きました。

一方、ギアツ批判をしたものですから、その後おまえの考えはどうなっているのか、と人にいろいろ言われて、自分なりの答えを書いたのが“De-agrarianization in Rural Java: The Case of Comal District, Indonesia”<sup>ix</sup>です。これは、アジ研時代の先輩で立教大学にいらっしゃった梅原弘光さんが東南アジア農村の脱農業化という共通テーマでされた国際シンポジウムで、ジャワ農村についても脱農業化が進行しているということ、過去のフィールド調査のデータを使いながら議論したものです。

それから、“Agricultural Involution and De-agrarianization in Rural Southeast Asia: A View from Case Study in Indonesia”<sup>x</sup>はその延長です。これは京都の龍谷大学で行われたシンポジウムで、やはりインドネシア研究者である加藤剛さんがオーガナイザーでしたが、そこで報告をしたものです。これらがインドネシアの農村経済全体に関する私のその後の仕事です。

## 5. インドネシアを齧る サブトピックへのお散歩

40 年間の蛇行と申しましたが、私は一つのテーマを一直線にまっすぐに追いかけて、どんどん発展するという足跡をたどっておらず、あっちへ寄ったりこっちへ寄ったりしてきました。日本にはあまりそういう川はないのですが、インドネシアのスマトラやカリマンタンなどに行きますと、全流域にわたって蛇行を繰り返しながら海へと注ぐ川がたくさんあります。それらの川のように、あちこちへ寄り道しながら研究を続けて今日に至っています。一つのテーマに集中しているとやはりだんだん飽きてきます。飽きてくるので、頭をリフレッシュするためにも、いわばサブトピックへ、ちょっと羽目を外してやってみる。そして自分の精神のリフレッシュを図る。ですから、本来の研究テーマから少し外れたことで、幾つか書いております。それが次に述べる一連の仕事です。

私は一般向けの新書版の本をこれまで 2 回書いています。初めて書いたのが、『揺れる多島国家 スハルト体制の 15 年』<sup>xi</sup>という本です。これは、自分の発意で書いたものではなく、当時まだアジ研にいましたが、アジ研の先輩のところへ持ち込まれた仕事を「おれはどうにも都合が悪いのでおまえ代わりに書いてくれ」と言われて、それで書いたものです。

それから、1990 年代後半にスハルト政権の崩壊という大変動に立ち会うことになりまして、そのときの見聞を本にまとめたのが、『インドネシア繚乱』<sup>xii</sup>という本です。これは、自分で考えた題なのですが、私自身も出版社も事前の検索・調査が足りませんでした。まったく同じ題の小説を先に書いた方がいて、その方からお手紙をいただきました。それで何回か直接お会いしておわびを申し上げるとともに、おつきあいを重ねる結果になりました。

また、ある銀行のインドネシア現地法人の社長になっていた大学時代の先輩から、その会社が出しているニューズレターに毎号エッセイを書くように依頼され、3~4 年書きためていったら結構な分量になりました。これを一冊の本にまとめ直したのが『インドネシアを齧る - 知識の幅をひろげる試み』<sup>xiii</sup>というエッセイ集です。純学術的な研究書ではなくて、インドネシアをめぐるいろいろな蘊蓄を書き集めたもので、出版元の方で本のタイトルを考えてくれました。これらは研究の本筋からは少し外れるのですが、頭をリフレッシュするためにやった副産物的な仕事ということになります。

## 6. インドネシア大学日本研究センター (JICA プロジェクト) での仕事

インドネシア大学日本研究センターという施設が 1980 年代末に日本の ODA でつくられました。当時のいわゆる箱物援助の典型で、ハードウェアとしての建物を作るだけで、その後の制度としての運営をどうサポートするかといういわばソフトウェア的な対応を十分に考えていなかったようです。そのためたちまち運営に行き詰ってしまって、何とかしてくれという話が、インドネシア大学の当事者からジャカルタの JICA 事務所へ、そして JICA から文科省経由で東京大学へ持ち込まれました。東京大学で日本研究を担当しているのは、国際日本研究という看板を掲げていた社会科学研究所で、その社研に話が持ち込まれたわけです。社研にはインドネシアの事情が分かる人が誰もいないから何としても手伝ってくれと口説かれて、ここにテコ入れをする仕事を結局 3 期にわたって足かけ 10 年以上やりました。

その中でインドネシア大学側と共同研究をすることになりまして、ジャカルタへ JICA の長期派遣専門家として 1 年行きました。本当は以前にやった中・東部ジャワの農村調査の続きをしたかったのですが、同じジャワでも何百キロも離れたジャカルタにいたのではできないのです。それに「日本研究センター」ですから、日本研究とリンクした調査でなければなりません。そこで苦肉の策で、ジャカルタと東京の双方の首都圏の郊外社会の形成とその変容について、ケーススタディによる比較研究を行うということを考えつきました。東京については多摩地区、とくに多摩ニュータウンの例をとりあげることになりました。

さいわい多摩ニュータウンについては、かつての住宅都市整備公団が行った調査があり、その報告書に収録されている住民世帯別面接調査のデータを借用させていただくことになりました。また、三億円事件の容疑者にされかけたことからもお分かりのとおり、私は多摩地区で生まれ育った人間なので、多摩ニュータウンができる前のあの辺の事情がどうだったかというのは、生活体験として知っているというメリットもありました。

一方、ジャカルタ首都圏については、インドネシア大学のキャンパスのあるデボック市がジャカルタ都心からちょうど多摩ニュータウンと同じくらいの距離で、やはり新興住宅都市として成長を続けていました。そこでこの町のいくつかの地区を比較の対象に選び、学生アシスタント多数を動員して住民からの聞き取り調査を行いました。

この比較研究の成果をまとめたものが *Growing Metropolitan Suburban: A Comparative Sociological Study on Tokyo and Jakarta*<sup>xiv</sup> です。これは結構国際的にも注目されたらしく、欧米のいろいろな大学の図書館にも収録されているようです。

この仕事を私は続けたかったですね。東南アジア諸国の郊外社会の研究は世界的にも少なく新しいトピックだし、続けていくと面白いと思いました。インドネシア大学の若い都市社会学者たちに継続を希望していたのですが、カウンターパートのグミラルさんという日本研究センターの副所長だった人が大変な才人で、その後学内行政であれよあれよという間に出世して、気が付いたら 40 歳そこそこでインドネシア大学の学長になってしまいました。相棒が偉くなったのは慶賀すべきことなのですが、研究の方は止まってしまったのは、一研究者の気持ちとしてはちょっと残念です。

## 7. 経済史研究への巡回

大学に行ってからだんだん本業の研究は経済史を中心に展開していくようになり、その中で特に柱になった分野が三つぐらいあります。まず、戦前のインドネシアは一次産品輸出経済で、各種のプランテーション的な産物、あとは石油等の鉱業製品が輸出経済の中心でしたが、その産業史の研究を一つの柱に立てました。最初にひとりでやったのはジャワの砂糖産業で、最近では 5 年間ほど科研費のプロジェクトを若い友人たちと組織し、砂糖と米とコーヒーについてアジア全体をカバーする比較研究を試みました。

二つめの柱は、前にやった仕事の延長ですが、ジャワの村落史です。概念的な議論ではなく、現実に存在する村のレベルで資料の残っているものを遡ったり、あるいは実際に村を回ってみて村落史の調査をしました。

三つめの柱は、貿易統計です。これを、インドネシアに限らず東南アジア全体まで広げて、東南アジアの植民地経済というのが、国際貿易の観点からどういう特徴を持っていてどういう連関を持っていたかということ調べる仕事をしました。

そういうものを全部まとめて編纂して、一度はインドネシア経済史全体を論じたものを書いてみたいというのが若いときからの夢だったのですが、とにかく自分なりにまとめて一区切りをつけたのが東京大学出版会から出した『現代インドネシア経済史論 - 輸出経済と農業問題』<sup>xv</sup>です。

結びに替えてということですが、もう私は 62 歳になります。2004 年から法人化した東京大学では教員の定年を従来の 60 歳から順次延長して、最終的に 65 歳とすることになりました。一気に延ばすのではなく、3 年おきに 1 年ずつ延ばすことになっていて、そうすると私のところでは 64 歳が定年になります。あと 2 年いられることになり、もう一仕事ぐらいはできるだろうと考え、今注目しているのが、最近、マレーシア、次いでインドネシアで大幅に伸びているアブラヤシとそれを原料とするパーム油の生産です。いったいどういう会社がどういう経緯で、アブラヤシの農園やその搾油工場などを開いて経営しているのか、それを逐一洗い出してみる作業を始めています。これをまとめるのには数年かかりそうなので、それを第一線での最後の仕事にしたいと思います。

あとは余生の楽しみ探しということで、純然たる研究ではなく、しかし研究と接点があることで身体の動くうちは楽しんでみようといういろいろ妙なことを考えています。そのひとつをご披露します。インドネシアというのはアジアの国の中で陸地を赤道が横切っている唯一の国です。どこで赤道が通っているかという、スマトラとカリマンタンとスラウェシ、それからその東側にハルマヘラという島がありまして、第二次大戦の激戦地ですが、そこでも通っているのですね。

まずスマトラは何カ所か赤道を道路が横切っています。そこに記念碑が少なくとも 3 カ所は建っている。そのうち 1 カ所は既に行ったことがあるのですが、残り 2 カ所も見物に行こうと思っています。カリマンタンも西海岸のポンティアナック市の市内に赤道が通っていて、オランダ時代に建てられた有名な記念塔があります。一方、東海岸でも東カリマンタン州都のサマリダ市から北へ、天然ガスの輸出で有名なボンタン市へ向かう車道が赤道を横切るのに気づきました。そこで昨年、ボンタン市にさしかかる少し手前の丘の上に、朽ち始めた質素な赤道

記念塔がひっそり建っているのを実地に見てきました。

僻遠の地ハルマヘラ島はそもそも赤道を横切る道路があるのか不明ですが、中部スラウェシではやはり車道が赤道を越えており記念碑が建っています。ここも数年以内に出かけてみるつもりです。今までもっぱらジャワばかり見てきましたので、これをきっかけにジャワ以外の島々の自然や社会についても肩肘を張らずに観察できれば良いなと思っています。

## 質疑応答

---

(Q) 加納先生は研究関心が広くていらっしゃると思いますが、どの程度のスパンでご自身の研究計画をたてていらっしゃるのですか。

(加納) アジ研にいたころと大学に移ってからでは条件が全然違います。アジ研にいたころは、毎年どこかの研究会に入っていて、必ず年度末に報告を出せということをやられました。着実にヒットを打つことはできますが、計画を立てるサイクルは短い。大学へ行ってからはそうでなくなりました。最近の大学は今年の業績は何だったという調査が毎年のように来るようになって、だいぶ様子が変わってきましたが、移ったころはまだ非常に牧歌的で、長いスパンで考えることができました。ただし、計画したとおりにできたかという点必ずしもそうではありません。例えば、ジャワの農村史などは、同じ村とまではいなくても周辺の地域についてオランダへ行けば資料があって、ずっと過去をたどって一つのローカルな歴史が書けるのではないかと考え、10年ぐらいやろうと思っていたのですが、行って調べてみたらないのです。たまたまデータが集積されている地域もなくはないけれど、自分が調べてきた地域については残念ながらほとんど資料がないことが分かりました。そのため計画を変更せざるを得なくなったというようなことはありましたが、一般論としては大学では5年、あるいは場合によると10年ぐら이의射程で研究を進め、その成果をじっくりまとめることがやりやすいように思いました。

(Q) オランダ人がやる地域研究や農村研究から学んだことはありますか。

(加納) やはりインドネシアはオランダの植民地でしたから、われわれが予想していないような予備知識やチャンネルをオランダの研究者は持っています。一番驚いたのは、今年4月に惜しくも64歳で急死したフランス・ヒュスケン氏と二人で中部ジャワ北海岸のプカロンガンという町を散歩していたときに、旧華僑社会のリーダー、当時のオランダが与えたカピタンという称号をもっていた家系の華人が知り合いだから一緒に遊びにいかないかと誘われました。そこで彼の後について訪ねてみたら、何ということはない、日本で言う美容院を営む一家なのです。

その美容院の店主が訪問の相手で、一見ジャワの町のどこにでもいそうな華人の

中年女性に見えましたが、その人がいきなりとても流ちょうなオランダ語を話し出しました。中へ招じ入れてもらって、家屋の造りがふつうのジャワ人の家とは全く対照的なのに気づきました。美容院の看板を掲げた入口はとても狭くて目立たないのに、奥の間へ行くほど広々として家具や調度が立派になっていくのです。家族のことについて伺うと、大勢いるお子さんたちは世界中の色々な国に留学している、オランダはもちろん、アメリカにも日本にも行っているとのことでした。最近では日本でも研究が盛んになり、華人社会のネットワークの国際的広がりがよく知られるようになってきましたが、当時はそういうことには思い至らず、植民地時代以来のオランダ人たちの交際の深さと視野の広がりに関心させられました。

フィールドワークが命の人類学者であるフランス・ヒュスケン氏のような人は、現地の言葉をきちんとマスターして仕事をしています。不肖私もそうですが、彼はインドネシア語とジャワ語の双方によく通じていました。ところが、同じオランダ人の研究者でも歴史家の場合は、インドネシア語があまりよくできない人が多いようです。歴史、ことに植民地時代の歴史を研究する場合は、オランダ語の史資料を扱えばそれで済んでしまうことが多いので、インドネシア語をきちんと勉強しないのではないかと思います。同じオランダ人研究者といっても、人類学者と歴史家では全然タイプが違うことが分かって、それも勉強になりました。

(Q) オランダの研究者にとって先生の研究はどのような点で評価され、どのような点で魅力的だったと思われますか。

(加納) 先ほど言いましたが、19 世紀の古めかしい言葉で書かれたオランダ語の資料を読み通してそれを要約するなどということは、当時オランダでも誰もやっていなかったもので、こちらが思った以上に評価してくれました。また、結構オランダ人の研究者で日本とのつながりを求める人はいるようです。昔はインドネシアを独占的に植民地支配していたオランダですが、江戸時代の平戸や長崎のオランダ商館が象徴するように、彼らの通商ネットワークはインドネシアから東アジアの全域に広がっていました。まして、鎖国を解いた近代日本がいろいろな意味で「南進」の度合いを深めるようになってからは、日本と東南アジアあるいはインドネシアとのかかわりがどうなっているかを知ることは、切実な関心事になっていったのではないかと思います。

現代のインドネシア、あるいは広く東南アジアを見る場合に、日本との経済的、政治的、文化的交流は、一般に第二次大戦以前とは比べ物にならないくらい深くなっていますから、日本についての一定の知識、感覚がないと、いまの東南アジアの社会は分からないところがある。そういう意味からも、ヨーロッパの東南アジア研究者が日本に対する意識を強くもつことは多くなっているのではないのでしょうか。



(Q) インドネシア人による農村経済研究は昔と比べてどういう状況ですか。

(加納) 農村経済調査ということでは、昔は、学生が卒論とか修論でケーススタディをやったものはありませんでしたが、それは活字にできるようなレベルではなかったですね。活字にできるレベルのものがかかり出てくるのが、1980 年前後からでした。特に留学生がリサーチはインドネシアに一時帰国して自分の国でして、それからまた留学先へ帰ってその結果を英語でまとめて博士論文にするというのが 80 年代後半ぐらいになると非常に増えてきました。そういうものの中には、かなり精度の高いものが出てくるようになり、その集積は以前に比べるとずっと増えてきていると思います。ですからやはり 1980 年代が一つの転換点だったと思います。

(Q) いまの質問とも関係しますが、その場合、日本人が外国研究をやることの意義や比較優位はどこにあるとお考えですか。

(加納) どの国について外国人が研究する場合も同じだと思いますが、その国の人では気が付かない死角がどこかにあるので、そこに外国人による観察が独自の意義を持つ可能性が生じると思います。私の場合で言うと、インドネシアの地租制度の歴史を日本の地租改正の場合と比較しながら書いたものがあって、そのエッセンスはインドネシア語にも翻訳されているのですが、そういうのは日本人でないと書けない。日本との比較が一つのポイントになると思いますね。

必ずしも比較でなくても、アジア全体の国際関係の文脈の中でインドネシアの問題をとらえてみるとか、視点の取り方はいろいろあると思います。東南アジアのほかの国でも似たようなことが言えるのではないかと思うのですが、自分の国についての研究はかなり蓄積があって、レベルも上がってきていますが、国境を越えた研究になるとまだまだ弱いのです。インドネシア人は、例えばフィリピンやタイのことなど、同じ東南アジアのほかの国の事情や歴史になると、場合によっては私たち日本人よりも知らない。そういうものを前提とした研究は、なかなか東南アジアに人々自身にはやりにくい部分があり、それが私たちにとってはアドバンテージになるのです。日本でも同じですよ。欧米人の日本研究には立派なものがたくさんあるわけで、日本研究は必ずしも日本人の専売特許ではないわけです。アジアのその国の人がある国についてやった研究の蓄積が幾ら増えてきても、やはり外国人がやる研究はそれとは違う味を持ったメリットがいつまでも残るだろうと思っています。

(Q) 情報手段が発達し、現地に行くのも以前と比べてずっと楽になりました。こういう研究環境の変化が、研究の質やテーマの選択などにどんな影響を与えていると思いますか。

(加納) 1970 年代に私が初めてフィールドに入ったときは、ジャワの農村はそもそも電気

がなかったし、電話などはもちろん縁のない世界でした。村の人と事前に連絡を取っておくことは不可能で、いきなり行くしかないのです。1977年にジョグジャカルタ近郊のサワハン村で、調査が遅くなって日が暮れてしまい帰る前にモスクの前で涼んでいたら、顔見知りになったおばあさんがやってきました。そのおばあさんは面白いことをいろいろ質問してくれるので、とても刺激になったのですが、そのとき最初に彼女がジャワ語で言ったのは、「兄さんはマレー語が上手だね」ということでした。インドネシア語とは言わずにマレー語が上手だと言うのです。その年配の人にとっては、まだインドネシアというのは生まれて間もない国で、国語としてのインドネシア語というよりは昔ながらの市場での共通語としてのマレー語という意識の方が強かったのでしょうか。その次におばあさんの口から飛び出た質問は、「兄さんは日本から来たというけど、どうやって行き来するんだい？スマトラみたいにバスで行けるのかい？」でした。そして3つめの質問は、これがいちばんびっくりしたのですが、頭上のお月さまを指さして「兄さん、日本にもあれはあるのかい？」でした。

そういう時代だったのが、1980年代後半から始まる通信革命で、村の人でも世界のことをみんな知るようになりました。2006年5月下旬、ご承知と思いますがジョグジャカルタ地方を中心に中部ジャワ南海岸地域では大規模な地震がありまして、サワハンという村は震源地に近いものですから大被害を受けて十数人死人が出ました。数ヶ月後インドネシア出張のついでにお見舞に行ったのですが、そのきっかけは、かつてお世話になった部落長さんの孫娘から携帯電話とインターネットを介して届いた連絡でした。そのお嬢さんはジョグジャカルタの町のホテルのフロント係になっていて、ホテルのパソコンが使えるものだから、Eメールで連絡が取れるのです。彼女の家族が私の泊まっているホテルへ迎えに行くという知らせがEメールで届きました。どんな人が迎えに来るのかなと思ったら、ドイツ人の若者が現れたので面食らいました。ベルリンの壁の崩壊で東西ドイツがひとつになったあと、インドネシアに進出した旧東ドイツの会社がジョグジャカルタに工場を建て、そこに派遣されて働いているうちに、お嬢さんと仲良くなり結婚して住み着いたのだそうです。

ドイツ人の運転する車で村を訪れるなどということは、私が最初に調査に入った1970年代には想像もできなかった。グローバル化の時代、ジャワの片田舎の村はとんでもない遠方と直接つながってしまったのですね。もちろん、70年代にも船員になって外国へ旅したとか、中東へ出稼ぎに行ったという話はちらほらありましたが、今はもっとその頻度が増えて、世界中と予想を超える密度でつながっている。

いま農村経済の調査をする場合、ある村、集落というだけのユニットを取り出して、その中を細かく調べ上げるだけでは分からないことがあまりにたくさんあります。昔はそういういわゆるコミュニティ・スタディに大きな意味があったと思うのですが、今はそれだけでは分からないことが多すぎる。だから農村経済を調べる

前に、今までのコミュニティ・スタディとは違う手法を何か考えなければいけないと思います。もう現場を離れて久しいので、私自身はこうしたらいいという提言がすぐにはできませんが、これからやる人は何かそういう新しい方法論を開発しなければいけないだろうという気がします。それは農村経済に限らずいろいろな分野で言えるのだろうと思います。

- 
- i 「19 世紀ジャワの土地制度と村落 (デサ) 共同体」(斎藤仁編 『アジア土地政策論序説』, アジア経済研究所, 1976, pp. 155-212.)
  - ii 『パグララン - 東部ジャワ農村の富と貧困』, アジア経済研究所, 1979.
  - iii 『サワハン - 「開発」体制下の中部ジャワ農村』, アジア経済研究所, 1981.
  - iv Clifford Geertz, *Agricultural Involvement: The Process of Ecological Change in Indonesia*, University of California Press, 1969.
  - v 「ジャワ農村経済史研究の視座転換 『インボリューション』 テーゼの批判的検討」, 『アジア経済』, 20 - 2, 1979.
  - vi 「ダゲン - イスラム・カルヤワンの村の社会経済構造」, 『経済学論集』, 47 - 3, 1981.
  - vii 『中部ジャワ農村の経済変容 - チョマル郡の 85 年』, (編著), 東京大学東洋文化研究所および東京大学出版会, 1994.
  - viii 『インドネシア農村経済論』, 勁草書房, 1988.
  - ix “De-agrarianization in Rural Java: The Case of Comal District, Indonesia”, in Hiromitsu Umemura (ed.), *Agrarian Transformation and Areal Differentiation in Globalizing Southeast Asia* (Proceedings of RU-CAAS Symposium, 1-2 November, 2002), Tokyo, Rikkyo University Centre for Asian Area Studies, 2003.
  - x “Agrarian Involvement and De-agrarianization in Rural Southeast Asia: A View from Case Study in Indonesia”, Tsuyoshi Kato and Aysun Uyar (eds.), *The Question of Poverty and Development in Conflict and Conflict Resolution*, (Proceedings of the Fourth Afrasian International Symposium, 15-16 November, 2008), Afrasian Centre for Peace and Development Studies, Ryukoku University, 2009.
  - xi 『揺れる多島国家 - スハルト体制の 15 年』, 教育社入門新書 時事問題解説シリーズ, 1979.
  - xii 『インドネシア繚乱』, (文春新書 163), 文藝春秋, 2001.
  - xiii 『インドネシアを齧 (かじ) る - 知識の幅をひろげる試み』, めこん, 2003.
  - xiv *Growing Metropolitan Suburbia: A Comparative Sociological Study on Tokyo and Jakarta*, Center for Japanese Studies, University of Indonesia, Monograph in Japanese Studies Social and Cultural Series, No. 1/2004, Jakarta: Yayasan Obor. 2004.
  - xv 『現代インドネシア経済史論 - 輸出経済と農業問題』, 東京大学出版会, 2004.